



太錦隅田曙
編初

伊東專三著
前嶋和橋補綴
梅堂國政画

金松堂梓

下

中

上



10

15

20

25

30

AK68



水錦

隅田曙

初編 上巻

伊東專三著

前島

和橋補綴

梅堂

国政画

金松堂壽梓

水錦隅田曙初編自序

此書は有喜世新聞第三百三拾五號本年五月より題を設け、章を重ねて
 説續き、事の慶應の末年に発り、竟は本年の初に畢る。いと長々たる
 物語りも、第三百八十一號(本月)の紙面にて大團圓の局と結び、筆を閑ま
 吸煙と煙草薫らるる其折しも、金松堂の主個来りて是と梓と彫めんと
 乞えり、儘よのふみもせむ、又禿筆を取直し、夫が題跡もそのまゝ、
 水錦と名附つ。例の無草稿は書記し、先づ一袋と与へ、編輯の日
 ろるに、次出し。朝は編輯の局を開き、夕は刷方の手へ渡す。繁机茶君卒
 の間、認めり。紙面の遺漏を補ふ心得ゆゑ、漸々佳境に入らんと、自分勝
 手は保證致さば、江湖の君達へ云ふも更なる。新聞紙を見玉ひ、看客方
 も復読の愛顧を爰に垂玉る。梓元素より吾儕の幸ひ此上ありと云はまの
 明治十二年己卯四月下旬

伊東專三記



人帛切

88-8157



○水野の奥方
おまろ

○松川
文治



○水野光太郎

○塩田
おきん

○塩田治平

○澤田左内



應三年 守御祭禮 牛嶋 氏子中

月吉日 瑞野... 松本... 氏子中

氏子中



東都の勝地 隅田堤 真景

此処と見えたり
ゆめ目もたそふ
ゆるるてま乳山の
樹木
なまはくは
舟橋も

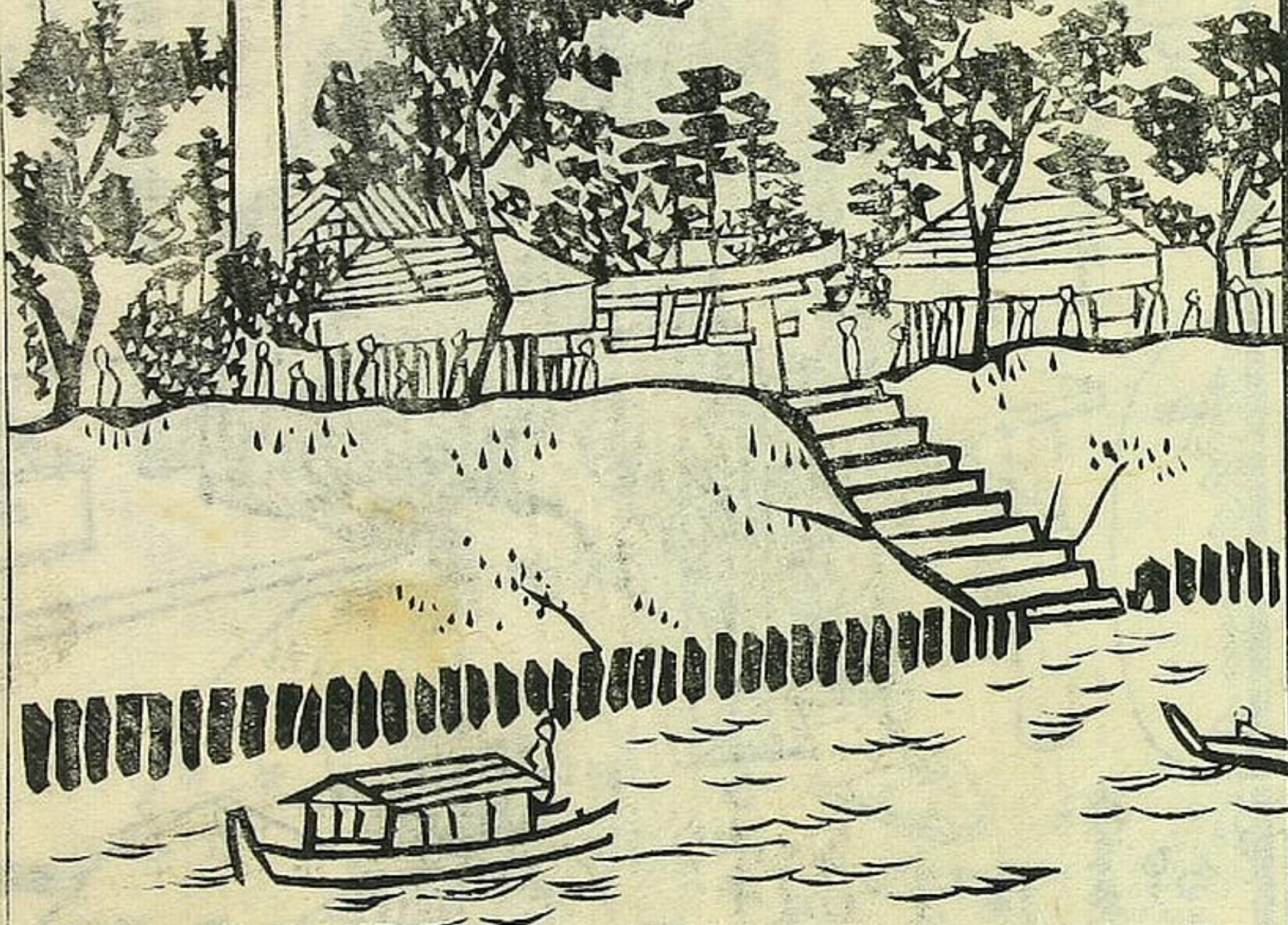


▲此の岸には見えぬイザと
なまはくは人のあふまぬ
樹木をふりて

▲糸几小腰を打たせしは茶屋の
と十八九の茶屋女とて人の者ふあ
あく接ぎの茶屋小舟渡波出たの
茶屋をふりて水野のゆるくま女を
あはれふまぬ茶屋女の舞ふとて
茶屋のまをふりて見せしゆ
あはれと拾目せし女茶屋とて
あはれと拾目せし女茶屋とて

別居のゆめとて
なまはくは地味とて
とて確りてとて
なまはくはとて
なまはくはとて

の岸七ツを
ゆるる隅田堤と
ゆるる茶屋の
樹木をふりて
なまはくは
の岸七ツを
ゆるる隅田堤と
ゆるる茶屋の
樹木をふりて
なまはくは



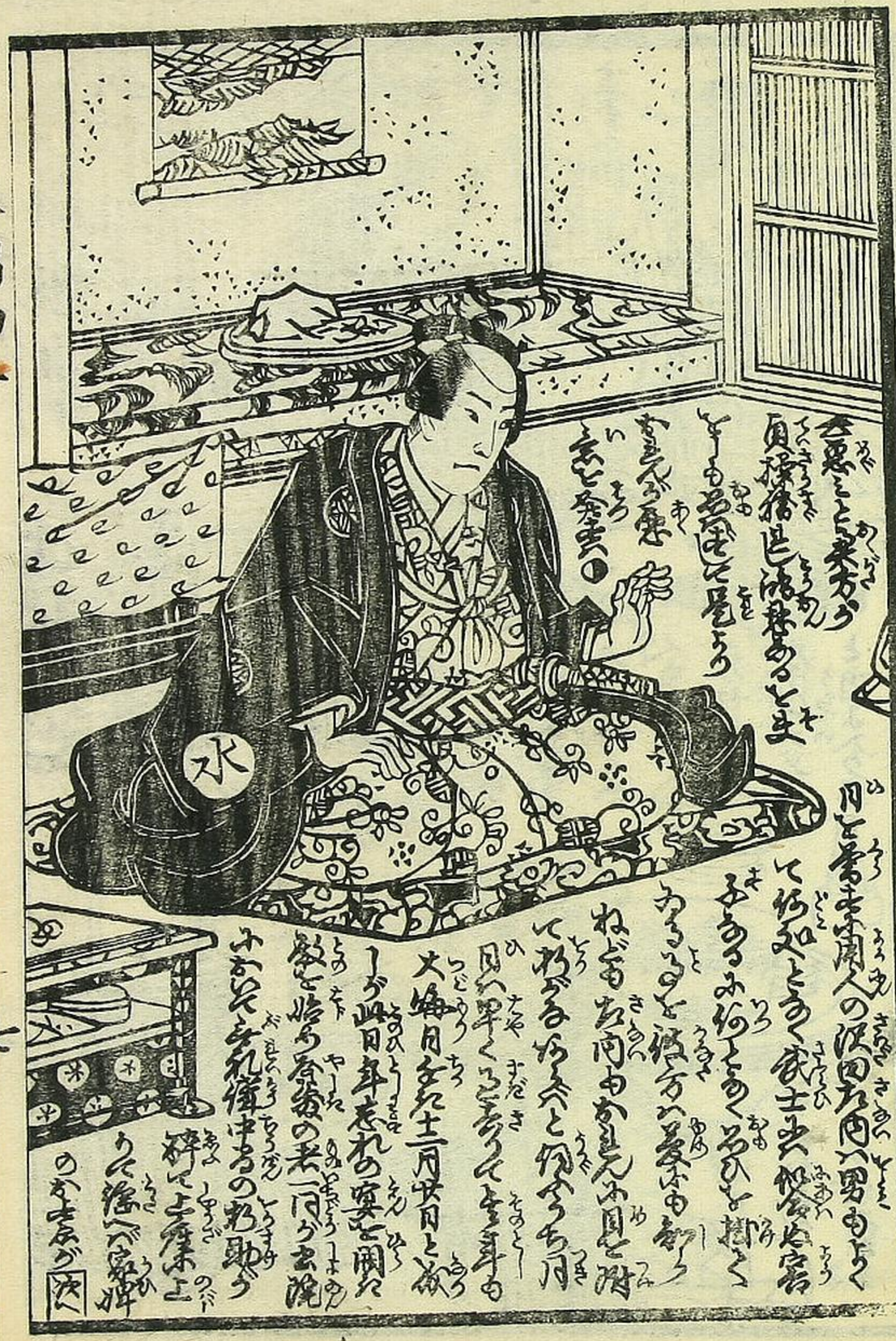
水路のゆるく
ゆるる隅田堤と
ゆるる茶屋の
樹木をふりて
なまはくは
ゆるる隅田堤と
ゆるる茶屋の
樹木をふりて
なまはくは

夫方おまの拾捌の
 生後由きは後藤の山
 子悪後いひ名のをふ木橋合
 元と口海もあまひううう
 も平を相静小をま由次た
 極合ともあまひううう
 あるのぞと中史とあ
 貞実なる事入候
 知より日ごう後藤の
 電)中用入沢田内
 と窮し極たれくと我入程と若
 知し何七史さるうううと仰せ
 右内へ橋とまの初極あか極入中上
 不くるれと先日白傳平のは名のたれ入事しとた

先はより後藤へ中上と由次とま
 相傳のか性後由かは中入申中
 ぶじがまはたれあまひう
 主女の元元と元と極たれ
 善上人あまひう
 斗らひねと貞
 操極と後藤の
 云々未だ因の云々
 色々錦をわのて人あたま
 極の意中と何ふ
 か入入の右内
 右あ也生う保
 細と後せふ右内
 東方の意と由後(色)

後藤くのはりあて後藤家の人体はが千文の女
 後藤のあまひうううううううううう
 と驚くとあてののわ後藤ままあまひう
 まのうと右内のかまはと若方へ篤とは
 若笑の我あまひううううううううう
 二年あまひうううう
 妻と
 女と
 妻と
 女と

善の意中と何ふ
 と出向傳よ
 初りを女の
 家と何ふ
 秋葉彩
 田と雲一
 久重極重
 妙小極ね
 仍た後藤治平
 小舎を初見へ後藤の目ふ
 ありし由はか屋敷へ上申中
 と云入るは後平叙か後
 うとたより腹ひに右内水知の



水
 月と昔き用人の沢田方内男由緒
 と知れども武士大坂の宿
 小のつとめたるひも掛く
 ねむる内由緒は月と昔
 月と昔き用人の沢田方内男由緒
 大坂月をた上月日と昔
 一か此月をた上月日と昔
 ねむる内由緒は月と昔
 月と昔き用人の沢田方内男由緒
 大坂月をた上月日と昔
 一か此月をた上月日と昔
 ねむる内由緒は月と昔



肥田よ愛る今日の業華をえん
 氏きして玉の瀬親の
 法年も娘のあはれ
 こそ長家と一軒
 頂戴のゆき定
 多き一あるの
 淫毒多岐の女やあき
 窮屈を嫌ふ娘はあはれ
 多き向うと昔の住むひも掛く
 水
 待く可死
 真のなぐ
 成とあひ
 初る他
 免備
 様とた

月と昔
 水
 月と昔

月と昔







AY68
2



水鏡

陽の曙

伊東春三著

前橋抄補綴

梅屋國政画

过文梓

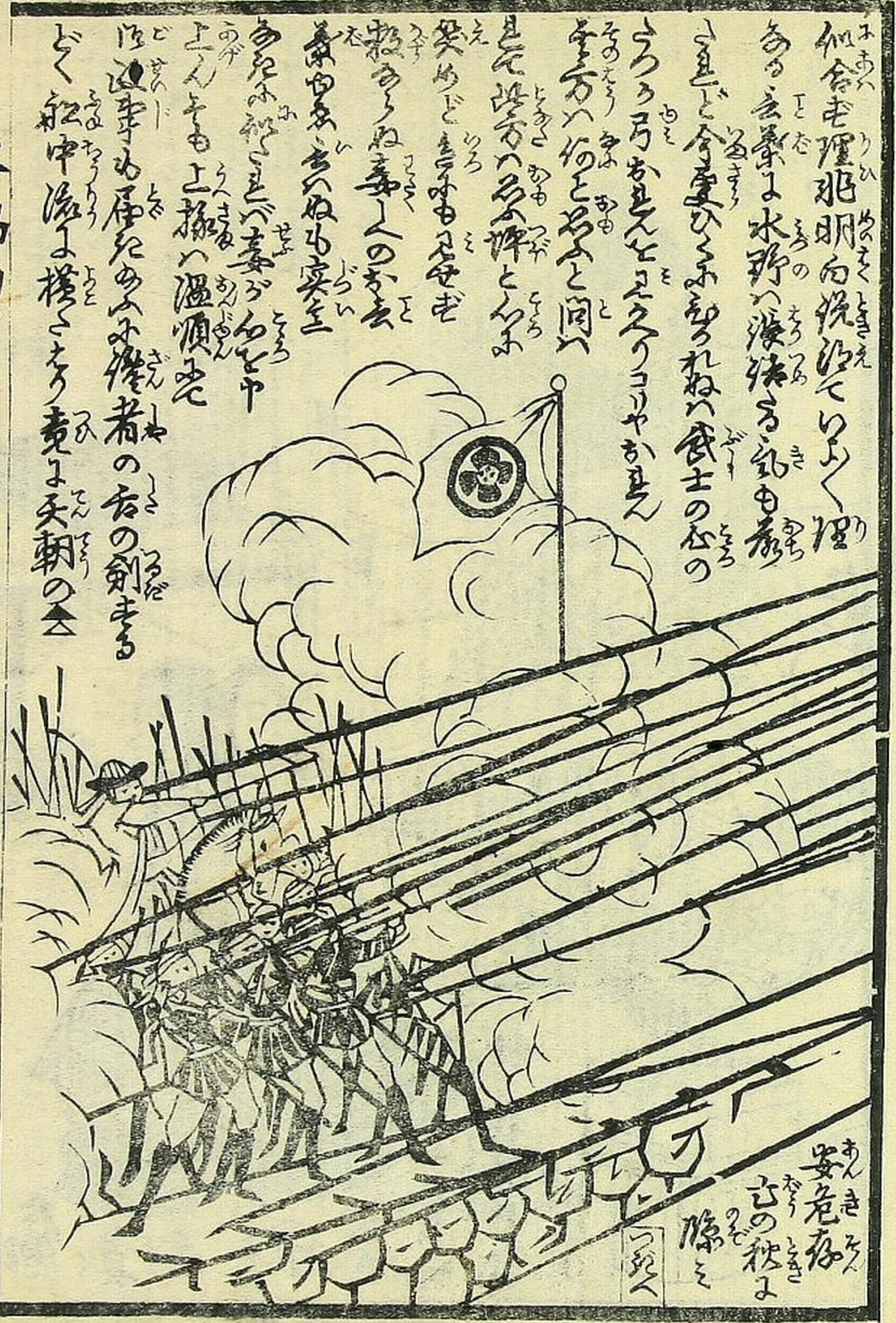
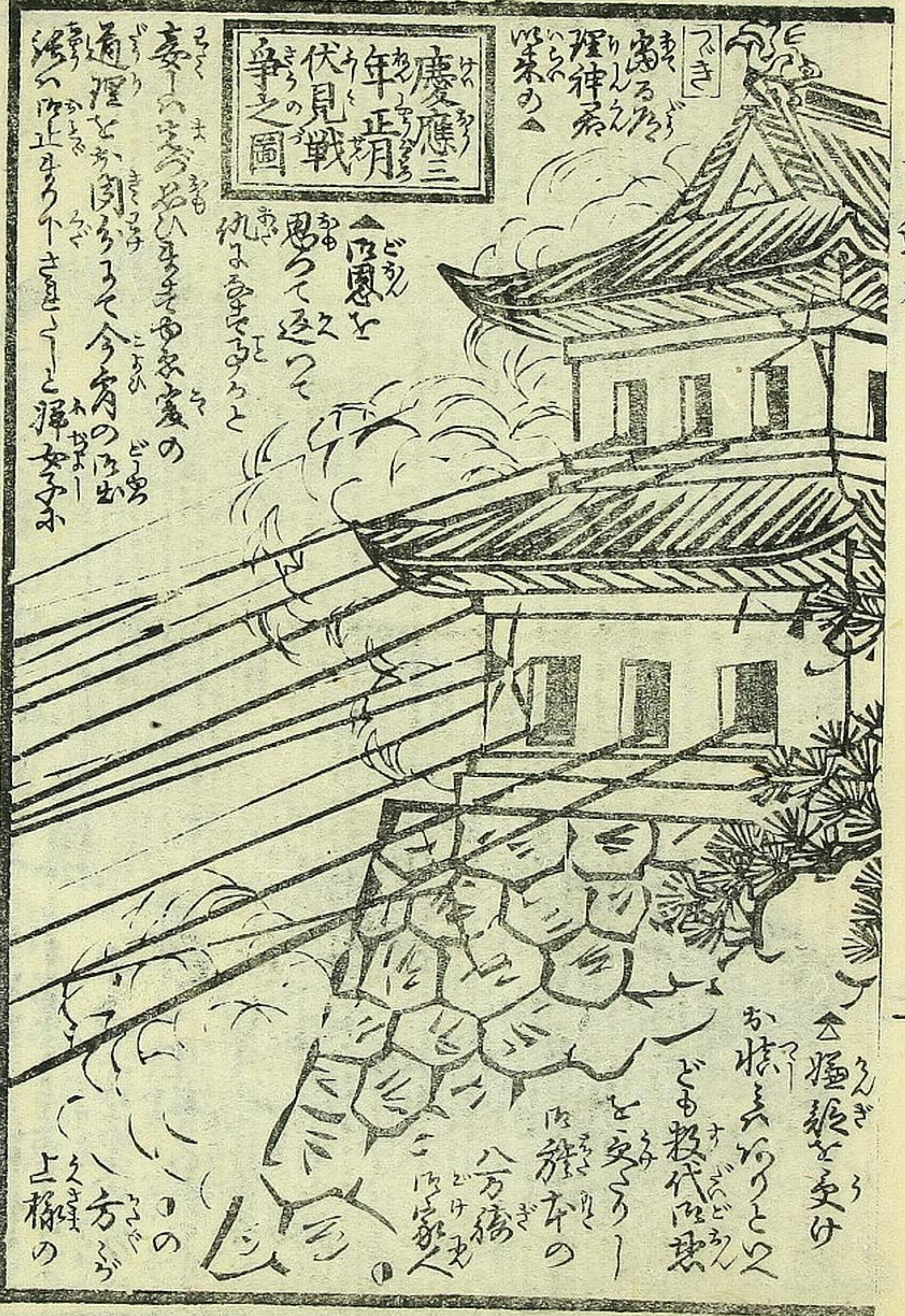
初編中

初編中の巻備わおまはるん年志れの
 芳沢田原南と身らほ
 も怪しむ後と清ひて
 よう難むかこまらひ
 合是と人自の園のいと
 紫花れは花きつてまほ
 あらまきつてくふ出合を果敢また
 突りも八声の翁お聲うさまの、別々のみ
 あらなるるるるる病持持、あかあて晴て
 命ひ得て娘衆のさめごととと人、密と合合せれ
 取の枝と海た二真柳の利巻のあまの障りはる
 とまけれはかと音一りて日とと一慶後四年も名
 ゐるを卯月の末の外の花後一水のまは絶るあた

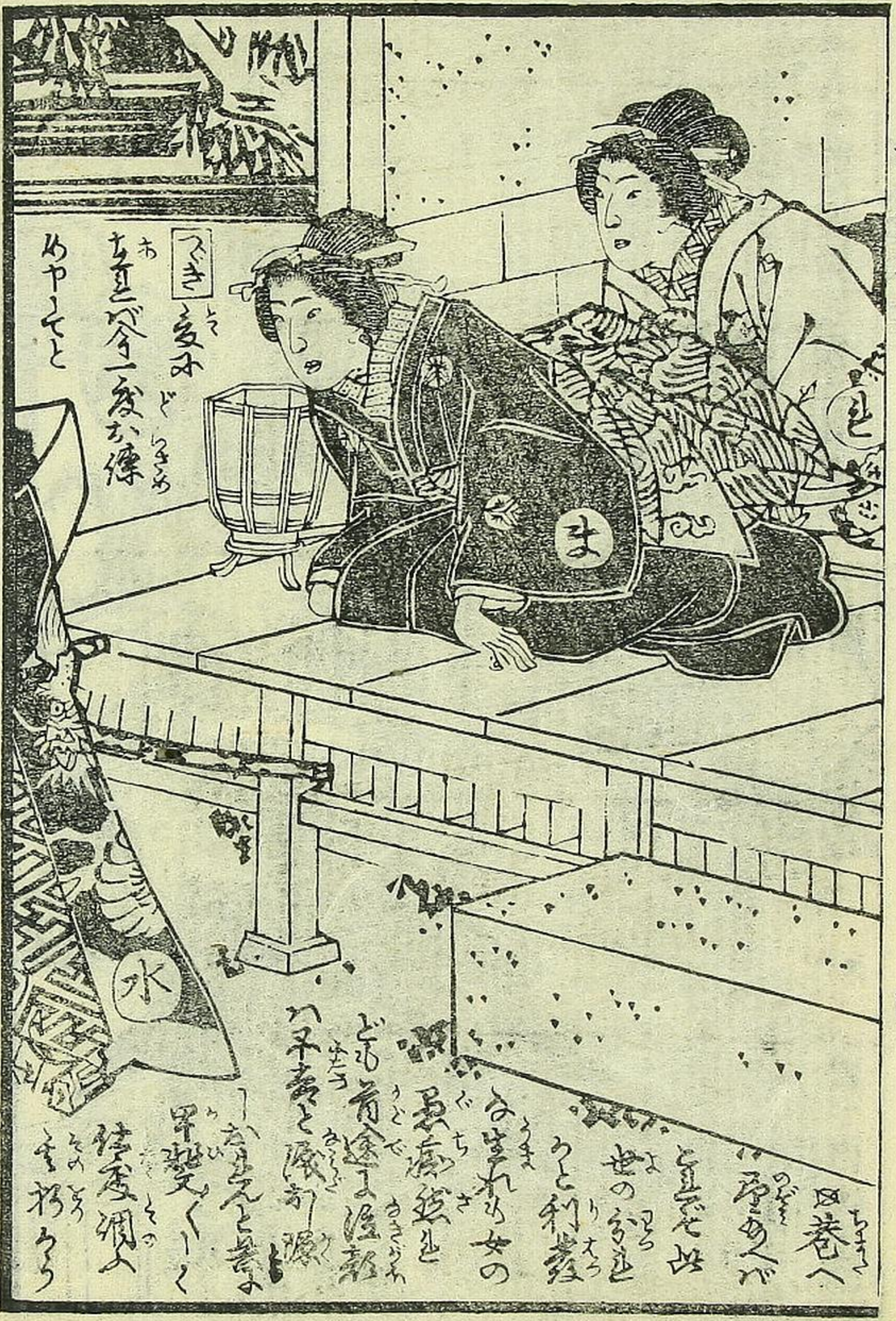
二月五日
 梅屋國政
 陰をくさるるの日の暮
 うて寂美あつはる月
 十日の夜水野を

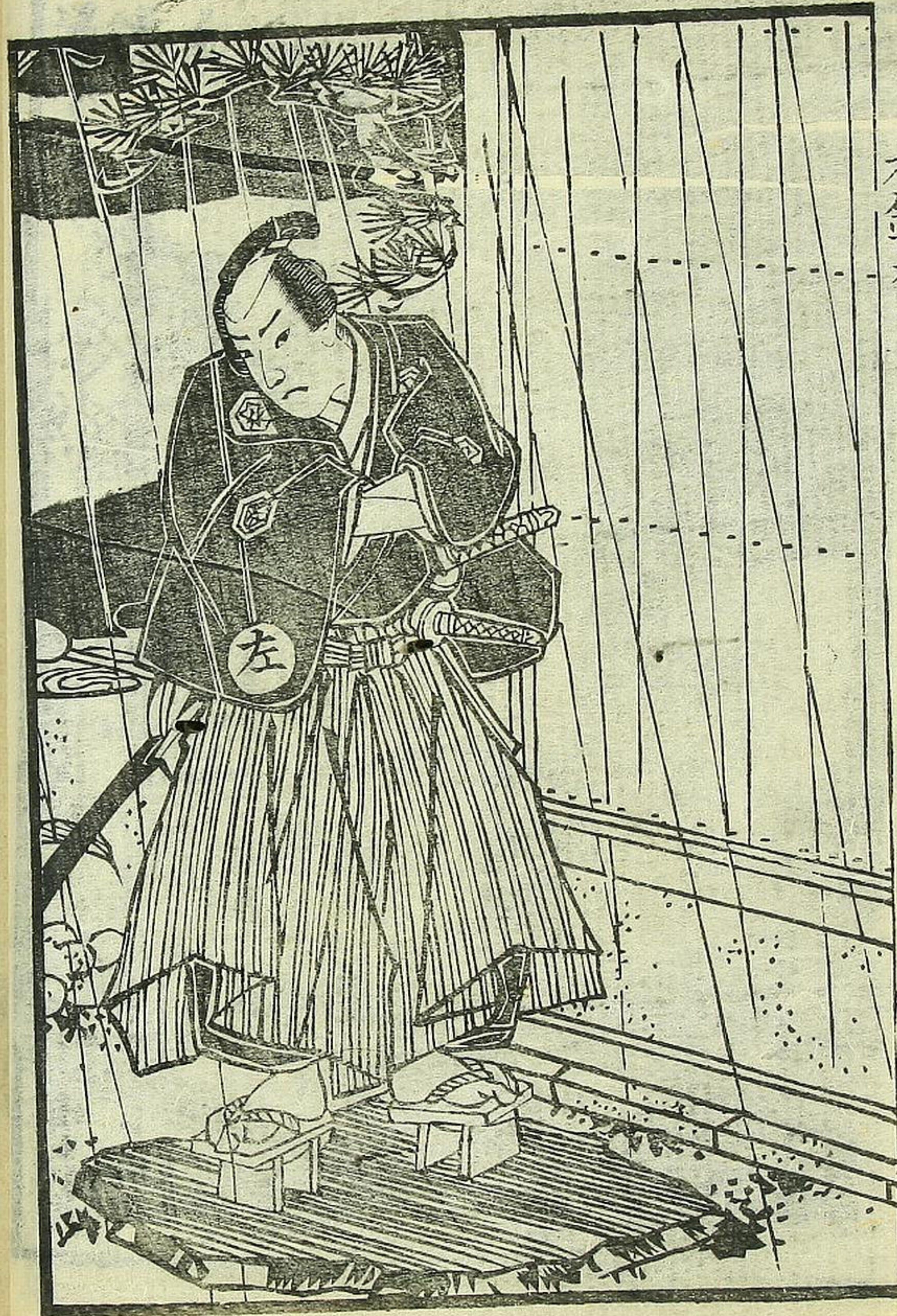
大帛巾中

48-2152



水錦初中





つぎ 女人の

道理ありきまを
のふ人已が巧と押隠

種くみあままじしあまらぶ
用房へ徳あひはるものく柳み

なりしがも連へ思入重入り
金もろがま初をの中へ

多も頼あつちうは飛石
清ひあひゆるは田方角い

ホくとあふとくくあての
相圖此方いそとま

ちうりそと引用て内と外

かまへうねん

うと然合
ち内い内へ物と

送入
かまへうねん

うとあ柳ゆ

ちうり



つとま 声とひきあてらる
 かり晴ては掃み成り
 しのとあき思つて居
 こののちあはれ極い
 ちうぬからあはれ極い
 も彼の親父が着
 堅気て先や前より
 うう又よのおも
 つるものぞこれ
 長き後い其あ
 の月より今あ
 との、あはれ極
 上階へあはれ極
 とをやり切らる

コリヤのひきと
 思ひ一由家あはれ極い

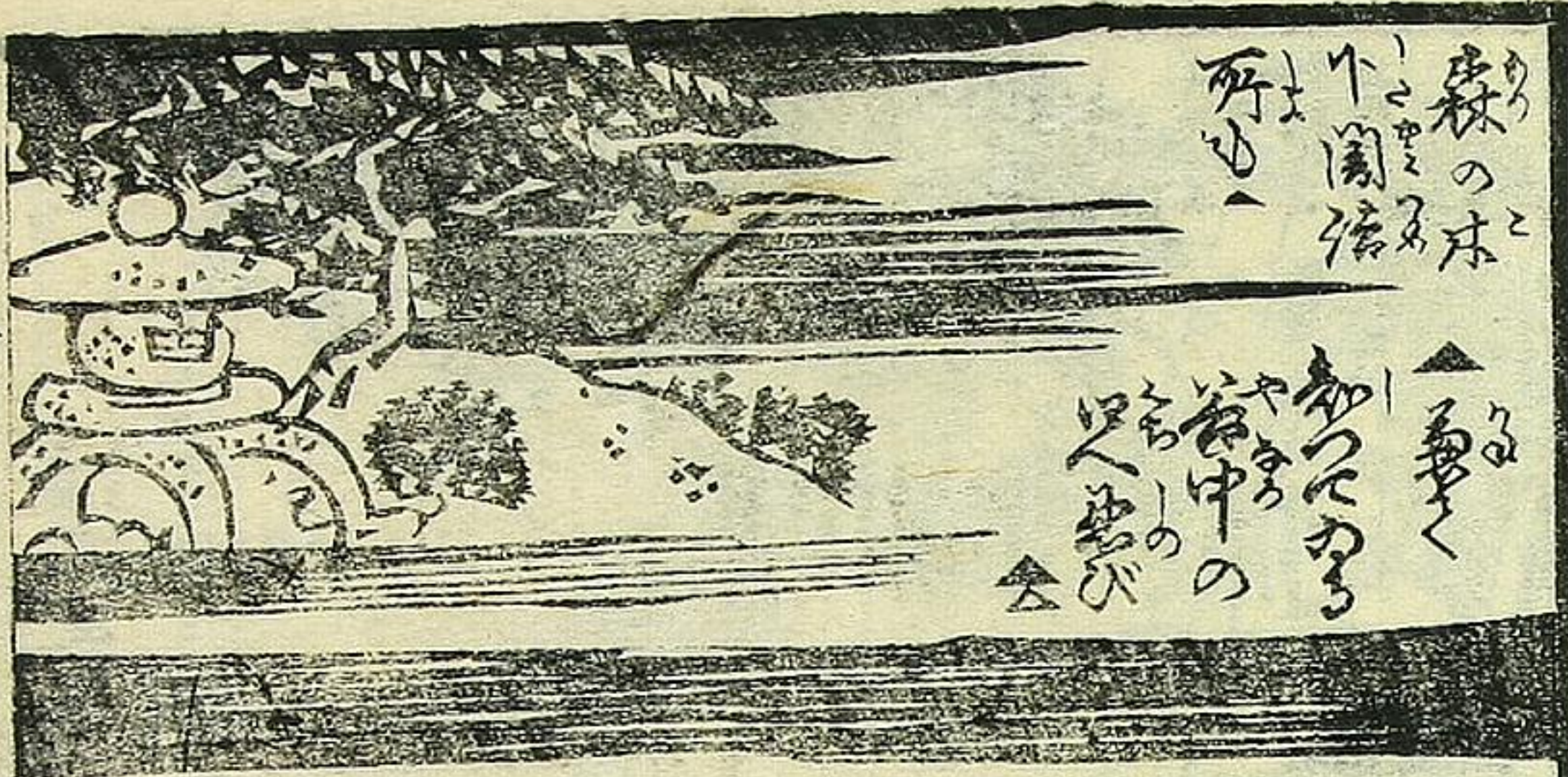
あて牛あま
 今とあまは月
 糸あまは月
 羽のあまは月
 是あまは月
 知れあまは月
 先こあまは月
 仕上あまは月



思つて居らふ
 候々い
 ろあ極い
 物の彼の
 と賢明
 振つて
 條云

あはれ極い

かけ先の
 片類あまは月
 流石あまは月
 是あまは月



森の林
下園信
死也

▲
あつた
管中の
足巻

水鏡の中

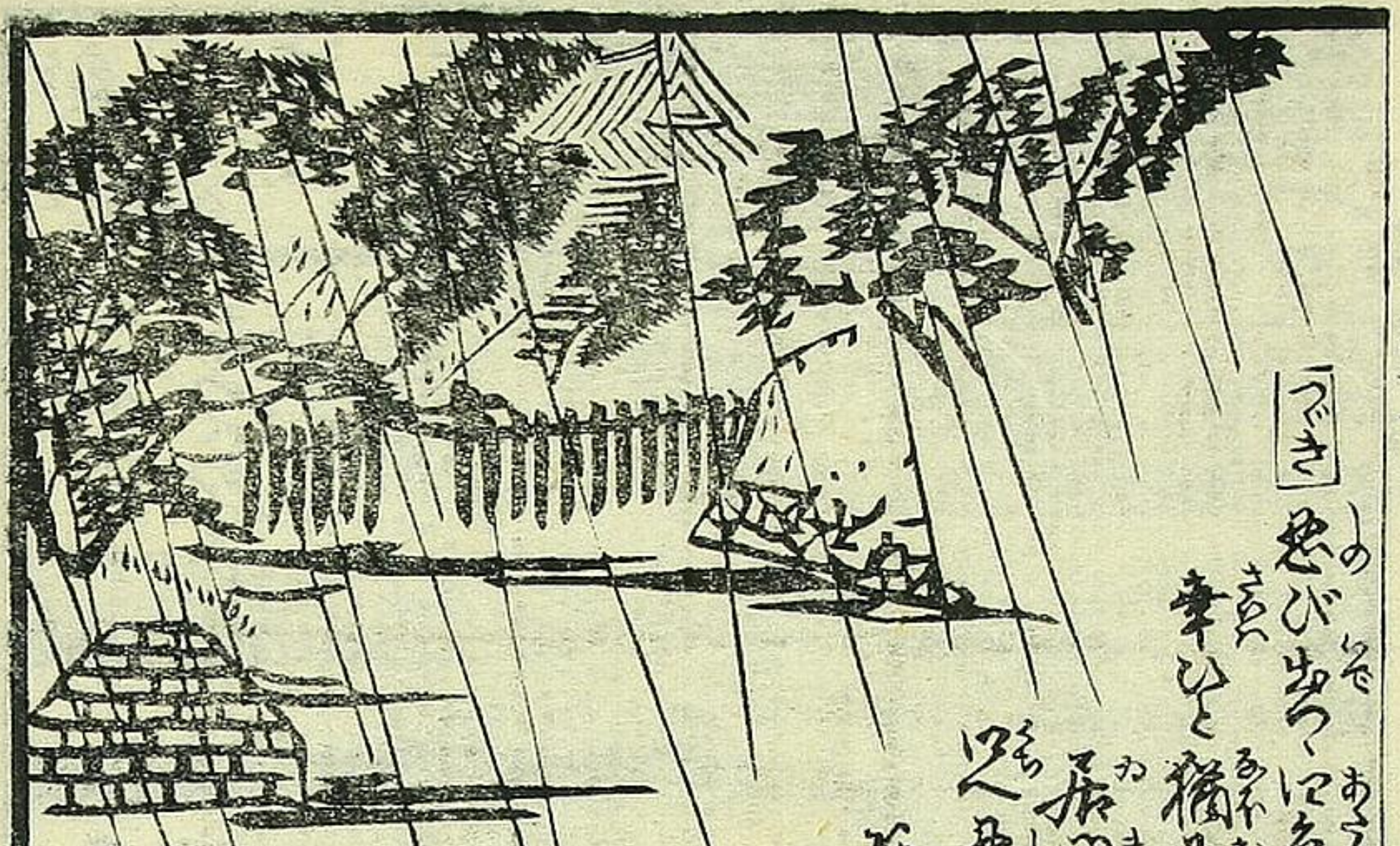
△
あつた
諸とも押行つた
の明ぬる
返せ
あつた
やた
へら
水
少
と
ち
ま
悪
悪



今宵の
うちよ野の
敵の
侍の
のり
寧の
今宵の
うちよ野の

水鏡の中

水鏡の中



「つき」の
 悲びあつた色を
 何ひ淋法まじへ
 幸ひと穢美深く
 庭傳ひ敷の
 長閑まをど
 近き年の
 只悲びあつた
 ホット下息ま
 りと見ま
 後茶よあをを
 掛く
 揺ゆらんとか
 と究め
 やつと見ま
 少くも
 初編中の巻より

あつた色を何ひ淋法まじへ
 幸ひと穢美深く庭傳ひ敷の
 長閑まをど近き年の
 只悲びあつたホット下息ま
 りと見ま後茶よあをを掛く
 揺ゆらんとかと究め
 やつと見ま少くも
 初編中の巻より

橘國郷編輯
銅版開化玉編
 全

島田豊三郎編
開化女用文章
 全

漆崎延房編輯
近世紀聞
 初編ヨリ
 十編迄出版
 以下追々発売

芳川俊雄 関永島五右衛門
夜嵐阿鬼怒花仇夢
 岡本勘造作
 大五尾編

同編輯
義烈回天百首
 全

唐文作
金花七變化
 三十一編マデ
 次編出版
 追々出版

假名垣魚貝編輯
高橋阿傳夜叉譚
 大八尾編
 守川周重画

秀賀作
濡衣女鳴神
 大十尾編
 國貞画

金地本問屋
 錦繪問屋
 金松堂

浅草花川戸一番地
 伊東彦三郎方同居
 編輯人 伊東専三
 日本橋區横山町三丁目二番地
 出版人 辻岡文助





このあきまをどのあけがの
水錦隅田曙
編初

梅堂國政画

前嶋和橋補綴

伊東專三著

金松堂梓

下



A468
3



初編下の巻

女は迷ふにまよひのた
 おと遠へ下田た内い
 急ぐ一教をり本町の屋敷を
 各妻も由渡りも死ひと
 方へ行くも由を死り下寺
 車板の

上野の
 神は表裡をるま
 其の本多の
 朝長海さの

▲和呂毛
 未の世は
 世の寂
 藤静ま

▲上野の
 中
 別れの鳥
 パット
 かねて
 あり
 其
 神は
 其



あはれ
 の
 伊集
 の
 中
 梅
 園

有
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

48-8153





つき澄をもちて
 引ッかへんと何
 ぶきの向ふ事
 月の生
 雲間
 へるるも
 又津波
 雨の星は
 暗れた夫の
 変と且戦

のゆり
 今少くと
 内は
 くり途
 せり
 むち
 う

かへるるも
 密に
 引久
 梅
 行



ひ且退
 何
 人
 切
 切
 左

かへるるも
 密に
 引久
 梅
 行

かへるるも
 密に
 引久
 梅
 行

かへるるも
 密に
 引久
 梅
 行

天と
焦して
宅の
火の
燃る

火のなる民家の

失火と

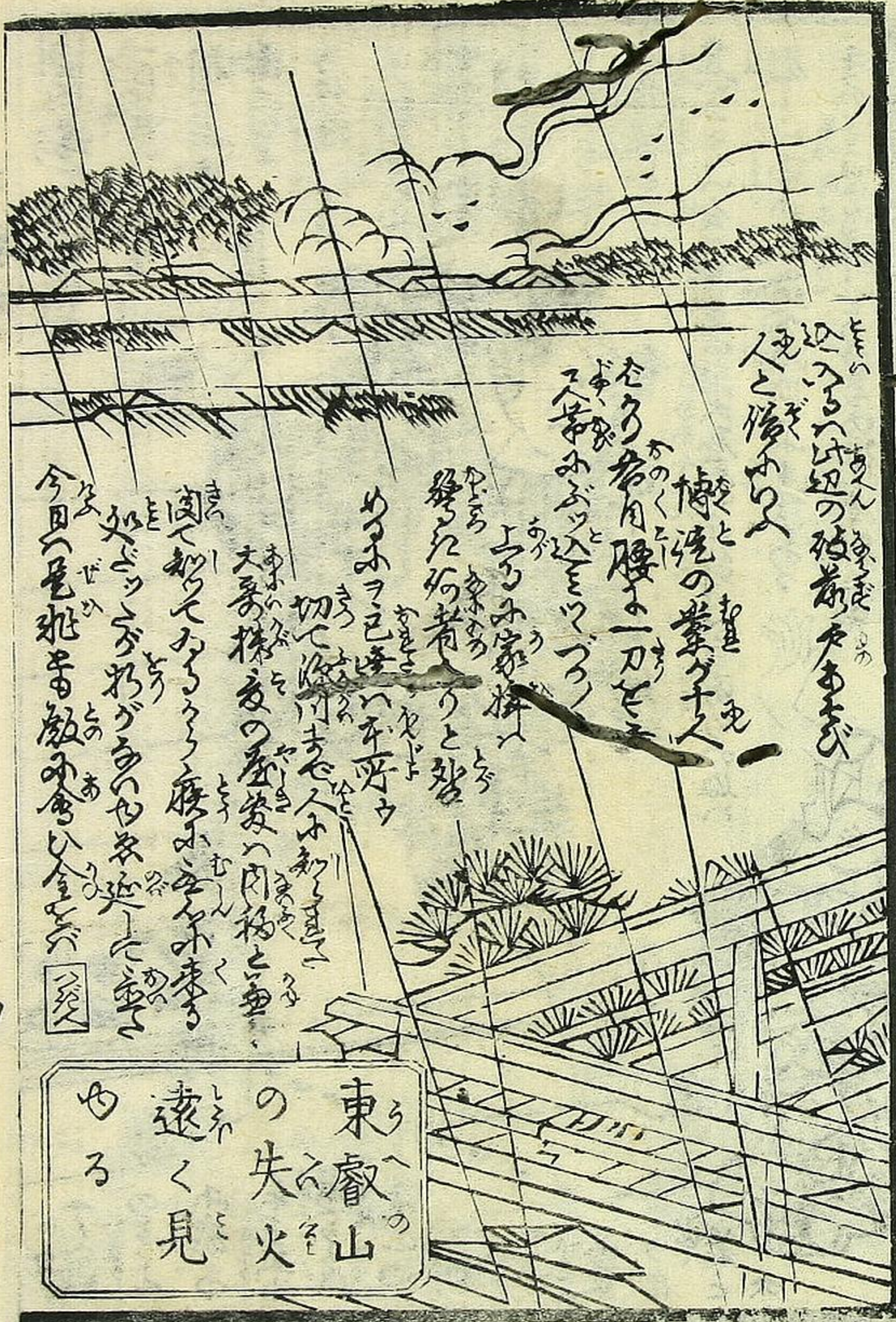
燃る

燃る

燃る

燃る

火のなる民家の
失火と



火のなる民家の
失火と

燃る

燃る

燃る

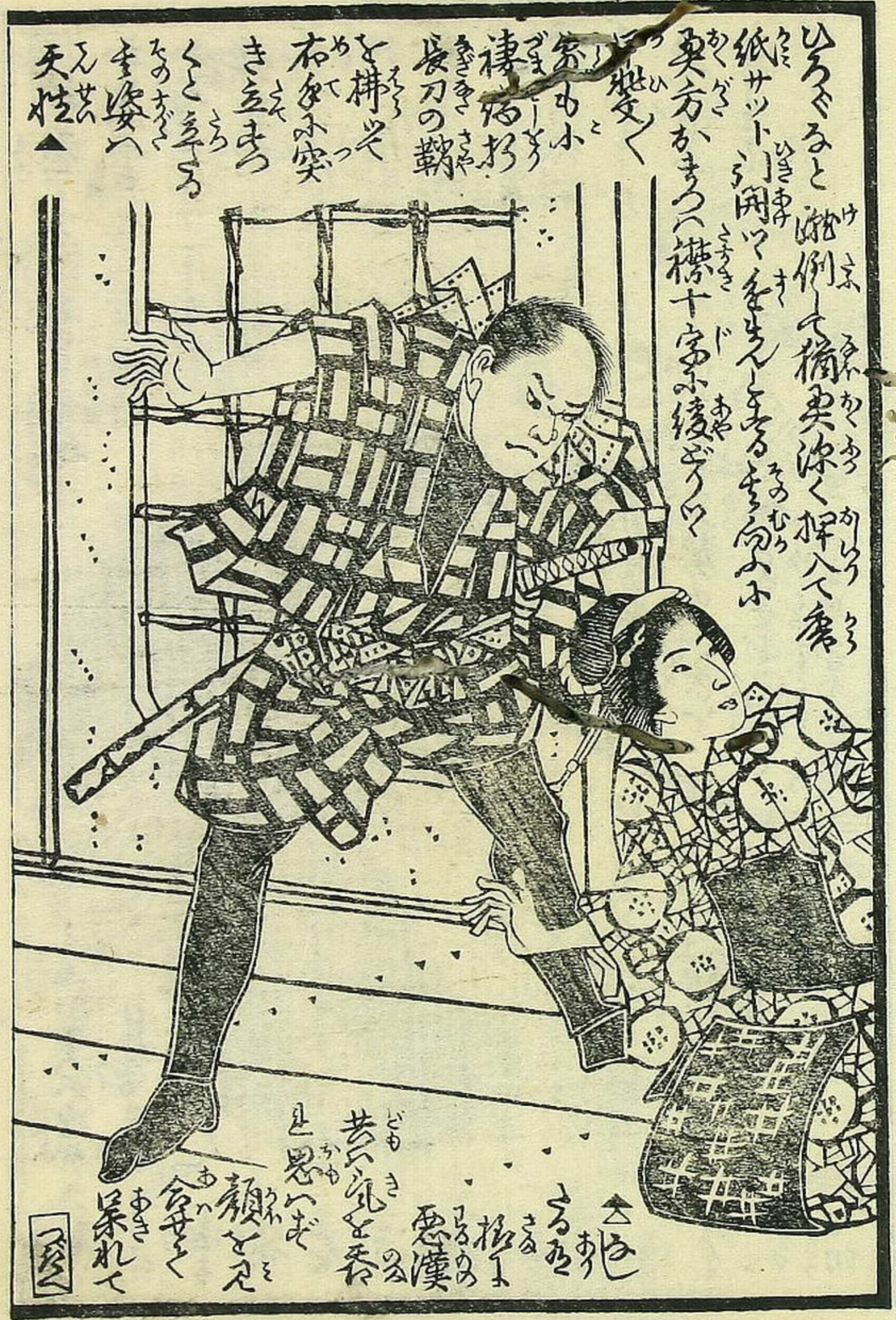
燃る

東叡山の
失火の
遠く見
ゆる



夏 結ておのこ
 一 同妻へ流し
 掛る小家
 牌へおど
 乃死様
 フノ取掛
 会掛
 一 早く由推
 悪漢
 其出先
 彼と一栗上野へ入りし小遠ひある
 歩のきぬ中
 其出先
 一 早く由推
 悪漢
 其出先
 彼と一栗上野へ入りし小遠ひある
 歩のきぬ中

夫の
 のき
 小威
 是と
 極
 是との
 一個
 の女
 夫の
 夫と



ひろるると
 紙サット
 奥方
 長刀の
 右小
 きま
 天性

夫の
 のき
 小威
 是と
 極
 是との
 一個
 の女
 夫の
 夫と



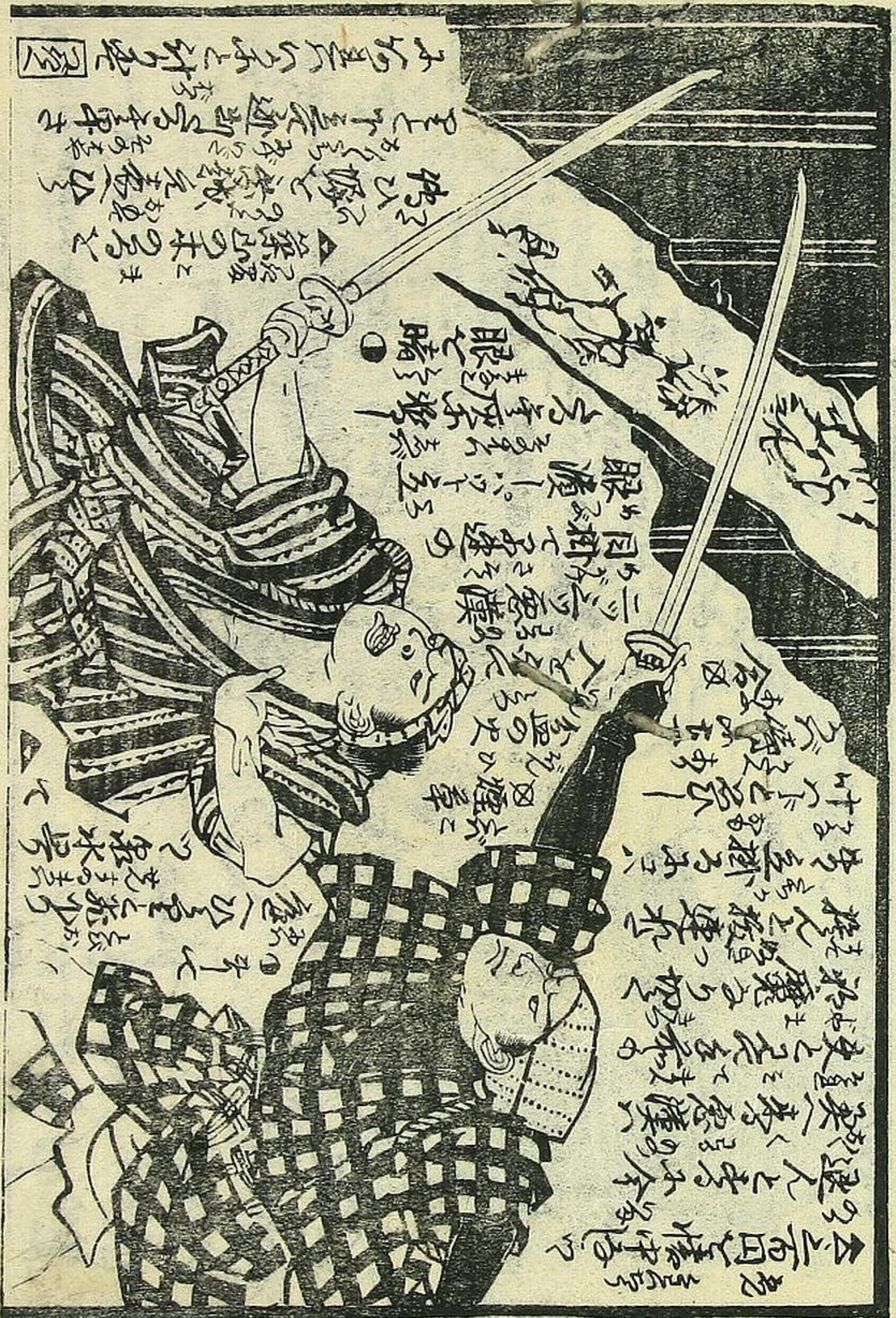
つき 暫く荒然とす
かまろへは身なりが敵様
お局もあつとそむき
隙を討ちむ所人共
武士の屋敷とまはる
汚し金と取らんと巧
むらぬ世間の縁
ぐたを這行とまら
悪の共死はま
あせりた
るべ目小
のよきん
むと

△お列の
長刀を
多勢の相を
物ともせど
戦ふ早業悪者
とみせど
切込め
互ち
たれ
△かまろへは身なり
むた
悪漢
子
成る
切



女は
大膽不敵不憚の
素の荒膽とむら
ら弱
△お列の
長刀を
多勢の相を
物ともせど
戦ふ早業悪者
とみせど
切込め
互ち
たれ

△お列の
長刀を
多勢の相を
物ともせど
戦ふ早業悪者
とみせど
切込め
互ち
たれ
△かまろへは身なり
むた
悪漢
子
成る
切



目之金

目之銀

目之銀



一さく押ゆりたり
 小水路が
 長谷と貫
 ひて舟と安楽
 一さく押ゆりたる由
 月の中を金庫

治
 一さく押ゆりたる由
 月の中を金庫



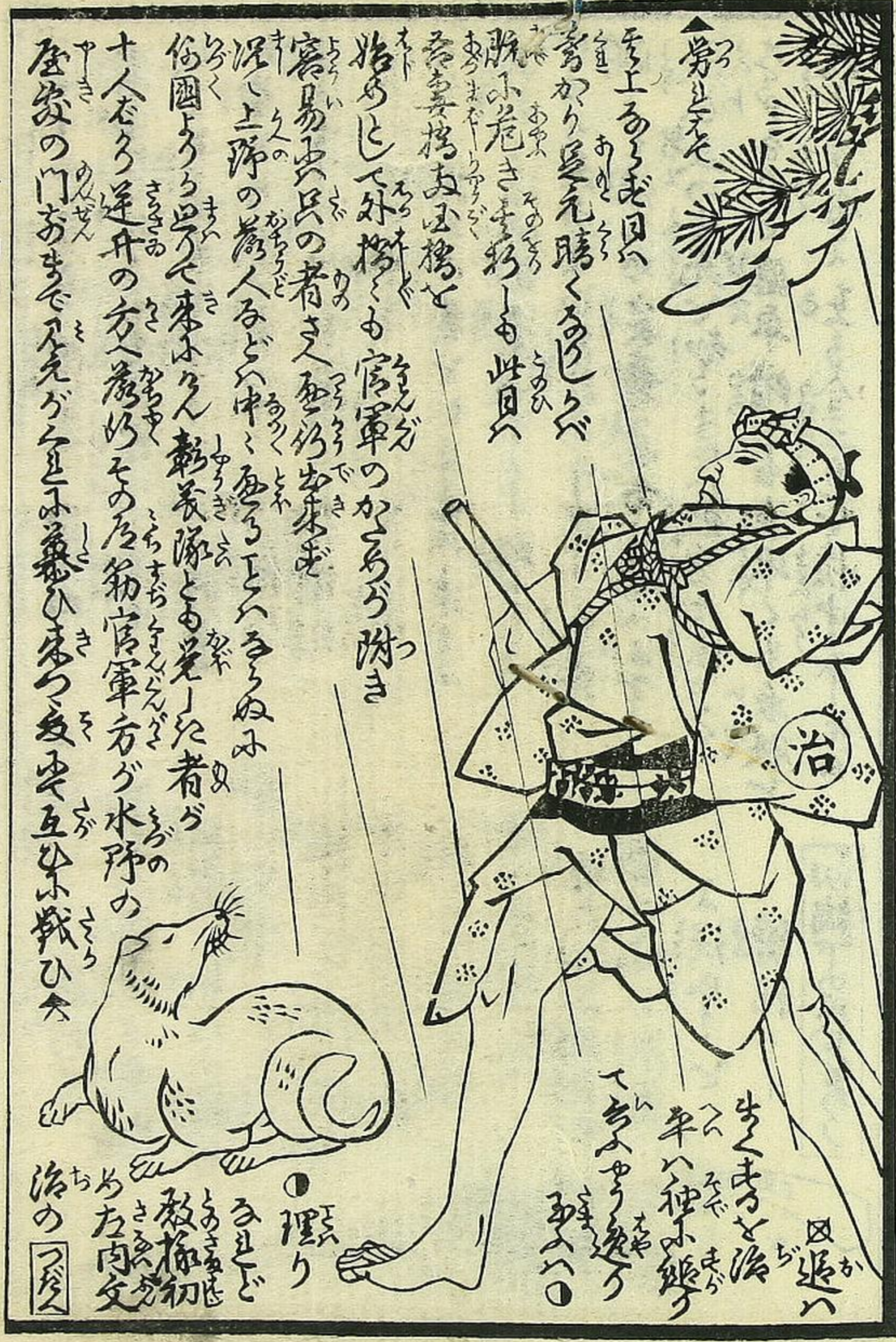
一さく押ゆりたる由
 月の中を金庫

治
 一さく押ゆりたる由
 月の中を金庫



つぎ 治平の
一 老より而性とのい
かまると教訓の残いふ
身許今い

門外の残いふ
サトト引くを妻
の老へは
共い
後地の
善終る
おたふ
本初め
つと掛て
打放す
善終る

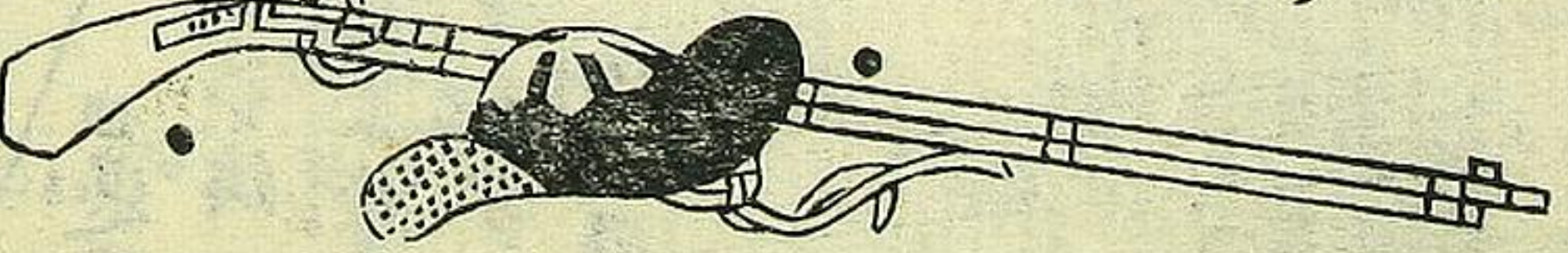


▲ 勇と云
そ上あらむ目
當かり足元晴くるるは
既小危きま終るも此目
を善格おは格と
始りして外格も官軍のかさあが附ま
容易大兵の者さるる必出末
況上流の為人るど申く危る上へるるぬみ
何國よりうらひて来ふらん 勲義隊とも是れ了者
十人を多逢舟の方へ為ゆその后箱官軍方が水野の
屋敷の門あきそ入るるは是れ義兵の末ら後互ひ小戦ひ

治
生えまると治
平へ神小鏡
てまふやう後
あへ
● 理り
みま
教初
あ内文
治の

生き死に更なる娘か先分見えぬ
 実子か何れも事の有れも見えぬ
 珠よ子母も生程よく殺しの殺し
 か勞も何れも素の心も必死
 入るも命とて後小島主人必死
 よりの彼の者等が又いふは是れ
 うら一巻か巻後とか五返り
 止何れと心恩案のうら一巻
 世のうらなまよひなれあをせと云
 衛しく煉りの実意要方もその
 随ひまの生死を知るまを
 ちるありと活平緒とも
 改めを迎へしる金二包と懐中

後門より
 先たへ活平が業内
 夕暮 若くは
 青と閑桂
 退たより畢
 野の一家
 美しく後の物
 徳林
 初編下の巻



橘鶴郷編輯
銅版開化玉編
 全

島田豊三郎編
開化女用文章
 全

漆崎延房編輯
近世紀聞
 十編迄出版
 以下追々発売

芳川俊雄 関永島要 齊西
夜嵐阿鬼奴花仇夢
 五編
 大尾

同編輯
義烈田天百首
 全

魯文作
金花七變化
 三編迄出版
 追々出版

假名垣魚文編輯
高橋阿傳夜叉譚
 八編
 大尾

秀賀作
濡衣女鳴神
 十編
 大尾

金地本問屋
 錦繪問屋
 金松堂

日本橋區横山町三丁目二番地
 編輯人 伊東 専
 出版人 辻 岡文 助

出版 御届明治十一年 五月 八日

浅草花川二番地 伊東 専三郎方同居



水錦 まぎのふき

隅田曙 まどかの あけの

第初編

伊東專三著

前島

和橋補綴

梅堂

國政画

金松堂壽梓

